

33 アートの会 10 月度 座学 報告

日時；10 月 15 日 水曜日 13:15 から 16:30

場所；市民センター205 室 5477

参加者；小林猛、天王寺谷、岡田、庄司、田中、榎本、高濱、辻井、山崎、永井、塩路弘子、山口弘子、安居院（記） 計 13 名

アラカルト 発明 天正遣欧使節 林忠正

今回は、アラカルトでいろんなものを取り上げたが、いろんなことが分かって、それぞれ楽しかった。

まず、人類の発明ベスト 5 って？ とても気になるが、ああそうだなと納得した。

次に、日本人で天正遣欧使節について、ヤマザキマリの視点からの番組であった。

示唆に富む内容であった。

そして、最後にはジャポニズムをけん引した日本人美術商・林忠正の本当の姿を知れた。

フランスでのことで知らないことがたくさんあった。それがよく分かった。

単なる美術で儲けた人、成金ではなかった。文化人として凄い人がいたことに感心した。

フランスに日本美術を知らせた、日本の恩人であることがよく分かった。

1. 世界を変えた発明ベスト 5

13:15-14:15

人類の歴史は発見と発明の歴史でもある。

先人たちの数々の発明の中から今回、英国の科学史家 ジャック・チャロナー氏が「人類の解放」をテーマに画期的な世界史上の発明ベスト 5 を選ぶ。



感想；

① ポンプ エジプトの話は説得力があった。

水を制することができないと農業は発展しなかった。

② 保存食品について、ナポレオンが命令したとは初めて知った、しかしフランスでは瓶詰めなので採用されず、イギリスでブリキ缶に詰めることで完成した。

③ 時計 つまり経度が図れるようになったこと。

④ ネジ これも吃驚。釘と違ってしっかりと締め付けることが利点。工業製品を作る機械は、これなしではできなかったのだ。

⑤ 活版印刷機 これは本当にすごい発明である。勿論、紙の発明があってこそそのものだが、手書きが活字になることの革命は、飛躍的に本が、知識が広がっていったということ。

漫画なども駆使して、映像が素晴らしく、とても分かりやすくまとまっていた。勉強になった。



2. 世界を見た若者たち -天正遣欧少年使節をたどるヨーロッパの旅- 14:15-15:15

440年前、長崎から世界に衝撃を与えた10代の若者たちがいた！

「天正遣欧少年使節」。

いったい彼らは何者だったのか？

美しきヨーロッパを舞台にヤマザキマリが謎に迫る

伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、
中浦ジュリアンの4人の少年達が2年半もの航海を
経て、漸く辿り着いたヨーロッパ。

彼らの偉業と足跡をヤマザキマリさんが紹介します。



感想；

天正遣欧少年使節の子供たちとヤマザキマリの共通点は、十代の時、何もわからない儘、ヨーロッパに放り出されたこと。カルチャーショックの度合いや、子供としてどんな心境であったかを読み取っていくという内容であった。訪れた後を辿って現在の姿を映し出してくれて、それぞれのところに残っている証拠を見せてもらうことで、とてもよく理解できた。

特に、最後の感想で、「何よりも体験が大事」と力説、今はスマホの情報のみに頼り、分かったような気になっている若者たちに対して、自分の経験としてしかわかりえないことがあり、それこそが大切な宝になると力説されていた。誠に同感である。自分の目で見、考え、自分の耳で聞いてこそわかってくるものがあるのだ。スマホのような他人の見解ばかりを鵜呑みにしては、馬鹿になってしまう。自分がなくなってしまう。

タイパ（タイムパフォーマンス）とかコスパ（コストパフォーマンス）とか、お手軽な方向に価値があると思っている現代人に、測れない価値があるということを教えてくれる。

その場所に行ってもこそ分かることもたくさんあるのだ。それこそ空気・匂いを交えた町の理解、文化の理解、住む人たちの理解こそが必要である。

僕らもすこし映像に頼り切っているのかもしれない。現地・現場を大切にしたいと思う。

3. 休憩

15:15-15:25

次回は、11月19日 水曜日 13:15-16:00 @211室

4. 知恵泉 「不屈の美術商 林忠正 “国賊” と呼ばれて」

15:25-16:05

19世紀、パリで活躍した美術商・林忠正。

あの手この手の知恵で、世界に日本美術を売り込み、
ジャポニズムをけん引した。

モネなど印象派の画家たちとも交流。

晩年は民間人初の万博事務官長に就任し、1900
年パリ万博を成功に導くなど、美術界に多大な功績



を残した。しかしその死後、日本国内からは“国賊”と呼ばれることに。いったいなぜ？
数奇な人生を不屈の精神で駆け抜けた忠正の知恵に、漫画家・ヤマザキマリが迫る。

感想；

これまた、ヤマザキマリの話に感心した。彼らは自分と重なるとのこと。

西洋人と日本人のはざまを体験している人ならではの意見には、傾聴すべきものがある。

日本人をけなされていると感じる西洋を知らない日本人たち。

西洋の常識はこれなのだと、善意で教えてくれているのに、馬鹿にされたと思いこむ習性。

今も変わらずにあるのだ。

今日知れたこと；黒田清輝を画家にしたのが林忠正だったとは、びっくり。まさしく日本美術界の恩人ではないか。そして、モネやドガとも交流があったと、貧乏な彼らにただで浮世絵をあげたというエピソードもびっくり。また、ゴッホに影響を与えた美術雑誌「イラストレ」の特集号（例の溪斎英泉『雲龍打掛の花魁』が表紙に載っているもの）の文章は、林忠正が書いたとのこと。本当にすごい業績だ。

さらに、1900年のパリの万国博覧会の日本館の責任者を伊藤博文首相の肝いりで要請され、自分の事業をやめ、報酬も辞退して勤め上げたとのこと。博覧会終了後「出品物を投げ売りしないよう」指示するなど、なかなか当時の人たちに理解しにくいことを実行したとのこと。など吃驚することばかり。

先日、大阪万博が終了したが、各国のパビリオンでは、持ち込んだ商品を格安価格に値下げしたとの話題もあり、100年たった今も変わりがないと仰天している。

持って行ったものがブランド品・芸術品なのか、単なる商品・みやげものなのかで、見解は分かれるところだが、日本政府が出展しているのだから芸術品、少なくとも価値のあるブランド品を展示したのだ。

埴輪など個人から借用して展示したのだから、持って帰るべきものであったのだ。

以上